

“信頼と現実性”

Wyss, D. :

信頼と現実性

Dieter Wyss

Beziehung und Gestalt

Vandenhoeck & Ruprecht,

Gottingen, 1973, p 88-93

Vertrauen und Wirklichkeit

訳：迎 豊（山形市・千歳篠田病院）

藤岡 邦子（高松市・大西精神衛生研究所）

ここに訳出したのは、Dieter Wyss の重要な著書の一つである Beziehung und Gestalt (Vandenhoeck & Ruprecht, Gottingen, 1973) の一節 Vertrauen und Wirklichkeit である。

本書は第一部（世界内存在の構造—心理学総論—）と第二部（世界内存在の不調和—精神病理学各論—）から成り、計550頁の大著である。

その中から僅か5頁半にも満たない一節を—それは第一部の第三章 Das Wirkliche の第三節である—あえて訳出したのは、それが余りにも卓越した内容を有しているからに他ならない。Vertrauen und Wirklichkeit という題は、一見すると、どのような形であれ、子供とは結びつかないような印象を与える。けれども、一読すれば、それは発達の観点から子供の世界内存在を、とりわけ乳幼児の心身発達の全体像とその本質をまざまざと描き出しており、他に比類をみないといって過言ではないことが知られよう。

本書の序文で Wyss はこう述べている。医学的人間学の領域において発生的発達心理学（とくに精神分析）と現象学的に方向づけられたゲシュタルト心理学を統合するのが本書の意図であると。そしてその際に彼は、人間的な相互存在の視点や社会的関係への視点が医学的人間学に必要な不可欠であることもあわせて強調し、それらの一体化を試みている。訳出した箇所は彼のその様な試みのごく一部にすぎない。けれども、見方をかえれば、それを通して彼の方法論や考え方の一端がよくうかがえるようにも思われる。

本書を古典紹介の列に加えるのはそれゆえ訳者の本意ではない。しかし、本書が日本では殆ど注目されないまま、十有余年を経てきたことを考えれば、その負目もいくらか軽減されよう。しかし、それは本書を古典に属せしめてよいということではなく、あくまでも本書を、そしてさらに Wyss の一連の著書を通して彼の優れた方法や考え方を二重の意味で vertraut なもの

とすることを、すなわち、それらを我々に親しみのあるものとし、またそれらについて熟知することを願ってのことである。

(迎 豊)

信頼と現実性

新生児の周囲世界に対する基礎的、一次的な関係は信頼である。周囲世界はこの絶対的な“無”の上におかれた信頼—なぜなら、新生児は世界についてまだ何の経験もしておらず、またそのような経験をもって生まれてきていないが、世界へと向けて方向づけられてるから—に対して全くありのままに現存在をもって答える。純粋な現存としての世界の意味は、現存する者としての現存における乳児の、その世界の現存に対する信頼によって最初の関係へと、つまり、直接的で、他の全てのことがらに先行して与えられる関係へとおきかえられる。言いかえれば、信頼はその関係性格を介して、手元にある、現存する世界としての世界の意味を構成するのである。それはまたこうもいえる。すなわち、手元にある世界としての世界が信頼の関係性格を必要としていると。両者はその原関係および原意味において分かちがたく結びついている。新生児の母への関係—それは直接的で、自然に与えられており、かつ独占的ですからある—や彼の期待に満ちた、食事・庇護性・あたたかさをもたらず者としての母親への信頼—それは彼の生物学的に規定されたどうにもならなさから導くことができる—は、現実性を基礎づけている世界への信頼から切り離せないし、またそもそも切り離してはならないのである。

信頼とは誰かに、あるいは何かに—事物、施設、自然など—自分を信用してまかせることである。人間であっても、物であっても、それはどちらでもよい。ともかく、他に自らを委ねること、自らを開くこと、心を打ち明けることである。この開かれてあることの中には可能なこと *das Mogliche* に対する開示性があるばかりでなく、可能なことそれ自体がその可能性に対して開いてあるのであり、それはまったく、現存在の身体性への信頼が、たとえば、母親が身体的に現存することへの信頼が、彼（新生児）に向かってくるものと生起してくることに對して開かれてあるのと同じである。彼に向かってくるものというのは、彼の身におきていることであり、その時その時の周囲世界ばかりではなく、彼に近づいてくる母親やその代理の者をも指している。

子供の身におきており、しかも母親の活動範囲内でおきていることが子供の一生に及ぼす影響を研究するのが精神分析の要件である。それには諸々の矛盾が内在しているが、次の点で一致している。つまり、後期の、純真でびくともしない自己信頼が—それは精神的健康さと相対的な個人的完全さの基盤である—周囲、とりわけ母親による原信頼 *Urvertrauen* の相対的充足に還元されるに違いないという点である。

この基本的な、現実性および現存在を規定する信頼は、周囲世界の現存や母親との関係を越えて、自己経験によって—それは自らの固有な身体との関わりの中で、次いで事物との関わりの中で展開する—自らの基盤を拡大する。その一次的および二次的な円環過程は—それを介して子供は自らの身体と自らの機能を経験する—、子供が強い信頼の下に世界の中に確固たる地歩を占め、走ることや言語を習得するまで役立つのである。その習得が、精神的および身体的に健康な子供の場合、不幸や失望などを超越して、うまくいくということは、幼児がベッドに上半身をまっすぐ起こす際にすでに—その成功は幼児の心に勝利の喜びを呼びおこす—観察さ

れうる。身体、つまり、神経・運動・骨格系の協同作用は周囲世界に対する一次的な信頼関係を継続せしめる。それを保証しているのは、習得された協同作用が正常に機能することである。脳損傷により器質的にその協同作用が障害された子供の場合、身体制御の習得が妨げられており、それゆえ当然のことながら、その後の人生に対する信頼の基礎を獲得することがとても困難となる。

身体との関わりができるのに続いて子供に開かれるのは、人と事物の世界であり、それは子供の積極的な活動による。そしてそれは次第に基本信頼を侵害する世界という危険にさらされる。それがとじるのは、養育者の禁止や命令によるばかりではなく、現実性それ自身の構成化がその現実性への原信頼を問うていることによる。能力・願望・意志などがまだ不十分にしか備わっていない子供にとって、それは窓から空中へと飛び出し、小鳥をつかまえようとするようなものである。その落下は、それ自体致命的ではないにしても、原信頼を動揺させずにはおかないし、今や子供が眼の前にしている一つの与えられた、完成した世界は彼の願望に一致しないのである。“現実への適応”についてはいろいろと記述されているが、それはここでは原信頼の狭小—現実性—を意味している。

抵抗の経験が生じ、またそれが増加するのは、子供が2歳をすぎ、周囲世界を征服するようになってからである。眼の前にあると分かった世界がごく限られた範囲でしか変化しえない、すなわち、ごく限られた範囲でしか自らの願望や空想（小児の自己中心性、小児の全能願望）が達成されないということは、ユートピアによっては解決しえない経験である。現存する世界は—それはそこにあり、またそこにあった、なぜなら、信頼がその世界の発見をもたらしたのだから—信頼性への要求を打ち消すことから始まる。個体発生的に自分自身と現存在を構成している信頼から、“あってはならないこと、ありえないこと”への、心理学的に“あまりにも人間的な”信頼が生じる。周囲世界は抵抗と境界を呈示しながら、そのような信頼の期待を打ち消している。その抵抗や境界はもちろん全く準備なしに子供にいきあたるわけではなく、子供は身体的な協同作用を制御する中ですでに、自らの身体の境界と抵抗を知っているのである。身体と周囲世界はともにはてしのない原信頼に境界を指し示すなかで、組んでいるようにみえる。あるいはその学習過程は自らの境界と周囲世界の境界を習得する中にあるともいえよう。身体は自然に即した失敗化という構成要件を考慮にいれており、その失敗化はそのような対決の中で“盲目的な原信頼”を、固有（身体的）にしてかつ周囲世界により与えられる抵抗もしくは境界を含む信頼によっておきかえるのである。

その学習過程に属するのは、部屋の中を這って通るのに腕が役立った後で、腕がより多く歩行に用いられることとか、重いもの、たとえば、本を直ちには持ち上げられないことなどである。適応が生じるのは、“道具”、“自然”、さらには人間がその相対的な行動反復において障害された原信頼を一つの信頼によって、つまり、“できる”という段階的経験に基づいた信頼によっておきかえられる場合である。

“できる”とはこう定義されよう。すなわち、自らに固有な身体的境界および周囲世界の抵抗と関わっていくことであり、またその範囲の中で行動していくことであると。

本を持ち上げることができたとき、帰宅した父の、ドアを叩く音で父の機嫌が分かる時、台

所の鍋がカタカタ鳴る音で夕食が近づいたのを知るとき、椅子をよじ登ったり、引出しを開けたりできた時などに、初めて道具に対して自ら“できる”ことへの信頼が、さらには所定の時間での食事を予見することへの信頼が生じるのであり、それらは現実性との関わりを自己信頼を裏打ちするものとしていくのである。

現実性とは今や“できること”“試みること”の日常性となり、また新たな能力の習得、日常性と自分自身との対決という日常性となる。その際、その対決は直ちに、現実性をかえる技術・骨折りへと至る。技術の習得へと向かう努力は、周知のように、現実性を常に自らの願望や計画、表象に近づけようとする。そのような対決は人間の過去や将来に関して際限のない努力という刻印を手に入れる。その努力は過去の歴史や迫り来る歴史の暗闇の中に我を忘れてしまうのが常であったし、またこれからもそうであろう。現実性、すなわち、“できること”への適応は、技術的援助により一次的な原信頼という現実性に逆戻りしようとする現実性に可能な変化をもたらすし、また主体の内奥にある願望・意志などと関連する現実性に至るが、その努力は必然的に失敗することになる。

現実性と信頼との間の関係はそれゆえ次の3つの歩みとして経過するといえよう。

- 1) 原信頼と現実性とは互いに構成しあう。
- 2) 原信頼は信頼によって“自らできること”へとおきかえられ、その“できること”は境界と抵抗との中で経験され、学習されていく。
- 3) その“できること”は再び現実性を変え、それを原信頼の状態に近づけるのに用いられる。

できることとその限界、作用と反作用を経験することは、子供がやり通すことを学ぶ作業—それが成功しても、失敗しても一から切り離すことができない。

その際、作業は日常の最も簡単な対象との関わりにおける作業の尺度、とくにその社会的制約や重要性の彼方に現れる。しかし、場合によっては、人間の操作にも現れ、それがあるときには成功、すなわち、作業として記帳される、またある時は失敗に終わる。ここで失敗が繰り返されると、たとえば、椅子が重く、わきに動かすのがうまくいかない時に、信頼の危機が生じることがあり、またそれが成人の態度によってその後の人生に好ましくない影響を及ぼすという事は明らかである。逆に励ましや慰めが、できることと抵抗とのくいちがいにより条件づけられて、障害された信頼を際立たせることがある。ここで注目しておきたいのは、できること、境界、作用と反作用などの習得が動揺、危機、しかしまた信頼の安定化をももたらすことであり、それと共に我々は作業の問題性に足を踏み入れているが、それは原信頼の分離を越えて二次的に生じているのである。

子供が自らの活動性—それはすでにゆりかごにいる時から始まっている—を通して周囲世界に自らを開いていく際に、彼は自らの活動性に対する人間や事物の応答を経験する。彼は自らの活動性と分かちがたく結びついた空間、時間、因果関係を経験するのである。空間は道のはてしない広がりとして、開かれた平面として、部屋として、アーチのかかった空として、あるいは自分の物、遊具、ベッドなどのある閉じられた空間として体験される。彼は空間を庭の垣根として、定住している土地として、整理ダンス、戸棚、机などのある場所として体験する。隣の部屋、階段の反対側の階、商店、売店、そして後には学校、隣の町、離れた地方などもそ

れに属する。諸々の場所はすでに諸々の多様な関係の意味中枢を構成しており、空間においてそもそもそうであるように、常にそれらに立ち帰ることができる。

自ら開いたり、閉じたりする空間は、その場所に子供は道を見出すのだが、許された事柄の中に現れ、禁止された事柄の中で閉じる感取された空間と分けられない。諸々の空間は、そこには関係と意味という関連において作用する者としての他者一人間が常にいるが、それが現実的な空間か、写真でおきかえられた空間かということは無関係に、一つの象である。無関係な空間というものは生物にはない。事務所や技術施設という抽象的な空間はそれ自体各々の関係の抽象化によって成立している。すなわち、無関係さをその関係としている。空間的に作用している現実性としての現実性は子供一厚い信頼の下に自らを空間に委ねている子供一によって経験される。けれども子供は広い領域の開かれた空間を前にして空間への信頼をその境界のなさへの不安へと転化させることがある。閉じられた空間はもはや安全性とか住居性を賦与しえなくなり、そればかりか、不意に窮屈で、胸を締めつけるように感じとられる。それは無化、ものすごい圧迫、死や窒息などへの不安の契機となる。換言すれば、空間の開けは、その空間に住んでいる人とは無関係にでも、空間的現実性への信頼関係の障害を潜在的に含んでいるのである。

子供は少なからず自らの行為を通して、自分がどのように作用と反作用をつくり出すのか、つまり、現実性がどのように応答するのかを経験する。この経験は因果性に対する関係、しかも自ら展開する関係にとってとくに重要である。つまり、(1)誘発することと作用を及ぼすことは現存在の現実性格を規定するし、(2)作用と反作用によって関係と意味の恒常的な移り変わりもたらされるのである。現実性を誘発することは最も近い養育者の反応を期待をこめて打診することにあるばかりではない。現実的なことへの作用は、例えていえば、積木遊びに、すなわち、積木を積んだり、それをめちゃくちゃにすることに示されるのであり、その応答も同様である。日常使用する対象との関わりの中で対象もまた誘発され、触れられ、棄てられる。そして再び前に置かれ、成人の行為を模倣しつつ、その使用が試みられる。かくして事物の特性は成人からみたそれを近似するが、そこに示される特性が必ずしも最も好ましい側面であるとは限らない。周囲世界を誘発することによって周囲世界との関係は、その意味にもまして、変わる。めちゃくちゃにこわされた積木の塔はもはや塔ではなく、周囲世界と積木の山の関係をなしている。腹を立てた父親は親密な人ではなくなる。彼は変化してしまっており、それによって彼との関係はおのずと変わるし、また同じく彼の意味も変わるのである。換言すれば、作用と、反作用（因果性）の体験によって現実的なことの応答可能性が誘発されるが、現実的なこと *das Wirkliche* とは応答の中にその具体的な諸々の可能性を呈示しているのである。

さて、子供はまだ境界のない持続の領域に住んでいるが、気分性や感情の動きなどの固有な（内的な）変化を介して、また周囲世界の変化を介して一步一步、時間を過ぎ去るものとして体験するようになる。時間という現実性は現実的なことの止揚に、つまり、現実的なことの“今そしてここに”という性格 *Jetzt-und-Hier-Charakter* の中にある。この止揚はおのずと展開する時間意識、おのずと変化することを介して自らを経験する時間意識によって基礎づけられる。それはこうもいいかえられる。すなわち、変化の知覚は時間経験と分かちがたく交錯している。

恍惚、酩酊、病的もうろう状態、そしてさらに夢などの体験は初めや終わり、瞬間などについて知らない。それらは持続についての経験である。時間意識は現存在の無常さについてばか

りでなく、その恒常的な移り変わりについての意識であり、それとともに移り変わりは、おのずと移り変わる秩序づけにも重要かつ関係のあるものとなる。時間は、空間における同じ場所へのあと戻りの可能性としての現実性へのあと戻りを疑わしいものとする。人間は、すでに子供の頃から、同じ場所に戻っても、それはもはや同じ場所ではないとの経験を余儀なくされている。たとえば、子供用のベッドが急に成人用のそれにおきかえられてあるとか、引越しによって毎日住み慣れた地域に行くことができなくなるなど。何年も家を不在にすると、人自身やその場所も、そしてそこに住んでいる人もおのずと変わる。時間によって親しみのある空間は親しみのないそれに、家は住み慣れないそれに、場所はまるで見知らぬそれとなるのである。

できることの中で再び獲得された信頼を根底から疑わしいものとするのは、それは数少ないが、時間である。時間は、殆ど気づかれない程度であるとしても、止むことなく関係と意味を変化させており、日常の慣れたことすらもそうでないことにしてしまう。時間は、今やすでにとても複雑なものとして浮かびあがっている“現実性という構造”の中で縫目としてあることが判明するし、可能なことは常にその現実性へ侵入しうるのである。